



# Youthが見たCOP26

UNFCCC COP26 Glasgow  
(国連気候変動枠組条約 第26回締約国会議)

活動報告書

## Climate Youth Japan

Webサイト: <https://climateyouthjapan1.wixsite.com/mysite>

Facebook: <https://www.facebook.com/climateyouthjapan>

Twitter: @climateyouthjp

Instagram: @climateyouthjapan

Note: <https://note.com/cyj>

連絡先: [climateyouthjapan@gmail.com](mailto:climateyouthjapan@gmail.com)

# CYJの紹介

## CYJについて

### Who is CYJ?

Climate Youth Japan(CYJ)は2010年春、気候変動問題に高い関心を持って活動しているユースによって設立されたネットワーク型NGOです。CYJのキーワードは、「気候変動」「政策」「ユースの意見発信」です。社会の中で若者が声を上げることにより、気候変動問題の解決を通じた衡平で持続可能な社会の実現を目指します。全国各地でのワークショップ、キャンペーン活動、海外ユースとの交流・活動などを企画しています。

### Our Vision

ユースが気候変動問題を解決へ導くことで、衡平で持続可能な社会を実現する

### Our Mission

主に以下の4つのミッションを掲げて活動に取り組んでいます

気候リーダーの育成 気候変動に関する国際交渉の場へ日本ユースを派遣することを通じて気候リーダーを育成する

意見発信 気候変動問題に対する日本ユースの考え・意見を国内外に発信する

関心向上 日本ユースの気候変動問題及びそれに関する政策に対する関心を高める

ネットワーク構築 国内外の多様なアクターとネットワークを構築し、協働する

## COP派遣事業について

このプロジェクトは国際会議へ日本の若者を派遣し、将来世代を代表したメッセージの発信や気候変動問題に関心を持つ世界のユースとの協働・交流、国内外への意見発信等を経て将来にわたり気候変動問題に取り組む人材を育成するために実施しています。COP16～COP25まで毎年日本ユースを派遣しており、その10回目となる今回のCOP26には新たに6名が派遣されました。派遣事業全体としては、4月から翌年2月にかけて、公募⇒選考⇒研修（合宿など）⇒派遣⇒報告を行います。プロジェクトを通じて派遣者は、気候変動に関する勉強や現地で行うイベントの準備などを行いCOPへと臨みます。また交渉に参加する多様な人々や気候変動に高い関心を持つ世界のユースと意見交換をしたり、自分たち自身がイベントやSNS等を通じて積極的に発信を行ったりすることで、気候リーダーとして活躍できる力を身につけていきます。このプロジェクトを通じてより多くの人々が気候変動に関心を持つのみならず、その解決を導けることを目指します。

## COP事業メンバー紹介



CYJ 2021年度会計  
柳澤 曆花



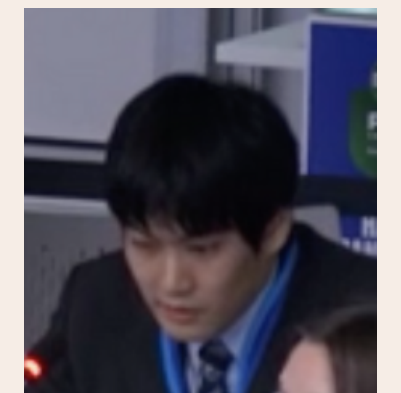
CYJ 2021年副代表  
田中 迅



COP26派遣事業  
現地統括  
古賀 瑞



CYJ 2021年度  
共同代表  
高野 愛



# COPとは

## COPとは

### COP ～Conference of the Parties～

国連の気候変動枠組条約(United Nations Framework Convention on Climate Change:UNFCCC)が、1995年以降主に毎年開催している締約国会議で、温室効果ガス排出削減等の国際的枠組みを協議する最高意思決定機関でもあります。



国連で定められたひとつのステークホルダーとしてのYOUTH (YOUNGO)

## Youthの役割

### 若者ってどんな存在？

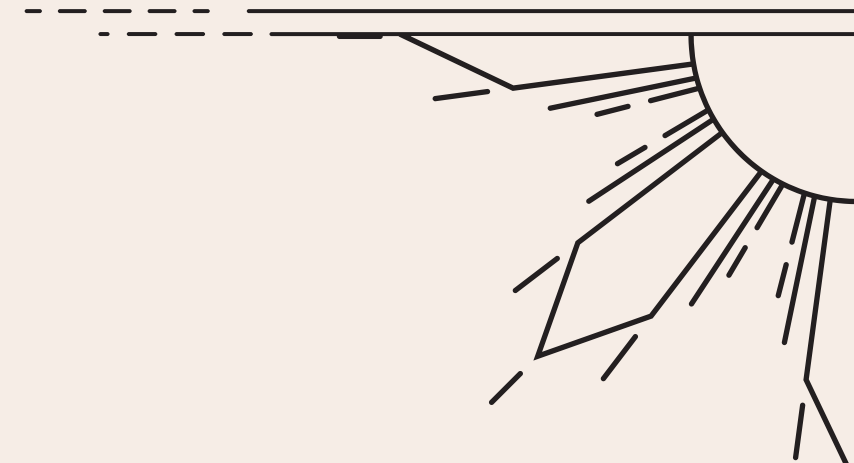
もちろん年が若い人のことを言うのですが、私達はその特徴を以下の三つに考えます。

- 1.若者は社会の一つのステークホルダーである
- 2.若者は長期にわたって社会に関わる
- 3.多くの若者が所属組織のしがらみにとらわれることが少ない

国連ではすでに若者の参画を推し進めており、若者が社会を構成する一つのステークホルダーとしてその立場が保証され、発言権が認められています。では私たち若者の意見はなぜ尊重されるべきであり、若者以外の人たちと比べてどのような意見を出すことができるのでしょうか。若者は年齢が若いからこそ、より自分たちが生きる遠い先の将来社会にも当事者意識を持つことができます。例えば、気候変動の文脈では年月が経つほど、気候変動の被害が深刻化されているといわれ、より大きな影響を受ける将来世代の声を私たちが代弁することも求められています。また、より長い期間社会に関わり続けるからこそ長期的な視点で政策を俯瞰できます。



スウェーデンで座り込み活動をする高校生 Greta Thunberg



## グラスゴー気候協定

### ①温室効果ガスの削減に向けた取り組み

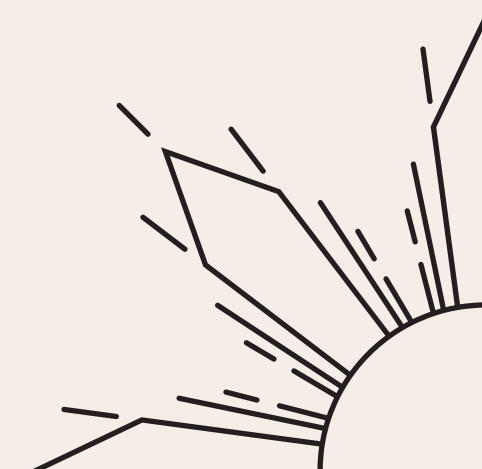
各国は『1.5°C目標』の実現に向けて温室効果ガスの今まで以上の削減に合意。温室効果ガス排出量を2030年までにどれだけ削減するのか、「再考・強化」したロードマップを、2022年までに発表するよう求められています。しかし、今回の取り組みの内容が果たされたとしても、地球の平均温度は2.4°C上昇してしまうとも言われており、『1.5°C目標』を達成するには不十分。達成するには、2030年までに45%の温室効果ガスの削減(2010年比)、2050年までにネットゼロを実現する必要があります。

### ②石炭の使用の段階的な「削減」

当初の合意文書案では、石炭の使用を「段階的に廃止」という表現だったことに対し、インド代表が「まだ開発目標や飢餓削減に取り組まなくてはならない」と反対。石炭使用や化石燃料への助成金を段階的に廃止する約束ができないと表明しました。最終的に、各国は「段階的廃止」ではなく「段階的削減」という表現で合意しました。

### ③途上国への気候対策支援の強化

2009年 COP15で、2020年まで富裕国は毎年支援金1000億ドルを提供すると約束されていたが、この目標は果たされず。今回のCOP26で、先進国は2025年までに気候対策支援金を2倍にするよう求められています(2019年比)。これまで先進国は1年で800億ドルを支援してきました。日本は2025年までに最大700億ドルの支援をする見通しを表明しています。





## 米中共同宣言

アメリカと中国が、今後10年間の気候変動対策で協力を強化することを盛り込んだ共同宣言を発表。メタン排出量の削減やクリーンエネルギーへの移行、脱炭素など、様々な問題に取り組み、『1.5°C目標』達成に向けてコミットしていくことで合意しました。100以上の国と地域が合意している2050年までの30%のメタン排出削減目標へ、中国は参加せず。その代わりにメタン問題に対処するための「国家計画」を策定すると約束しています。

## 森林破壊の終了合意

「2030年までに森林破壊を終わらせる」と約束する文書に、日本を含む世界110カ国の首脳が署名。この署名国には、アマゾン川流域の熱帯雨林で大規模な森林伐採を進めるブラジルも含まれており、署名国全体には、世界の森林の約85%が広がっています。2014年の「2020年までに森林破壊を半減させる」ニューヨーク宣言が実際に達成されていないという事実から、実際に行動していくことが求められています。インドネシアはこの声明に署名したものの、「できないことについての約束はできない」と批判。同国にある膨大な天然資源は国民のためにあると主張し、また道路を新設するためには木々を切り倒す必要があるとしました。開発が最優先事項であり、この声明の内容を守らない可能性も示唆しています。

## メタン排出削減

2050年までにネットゼロを達成するために、地球温暖化の原因となるメタンガスの排出を少なくとも30%減らす目標が掲げられました。この目標に日本を含む100カ国超が賛同。これらの国と地域は、世界の国内総生産（GDP）の約7割を占め、目標を達成すれば2040年までの温暖化を0.3度分低くできる可能性があるようです。しかしメタンの排出量が多いロシア、中国、インドはこの目標に賛同していません。

## 脱石炭

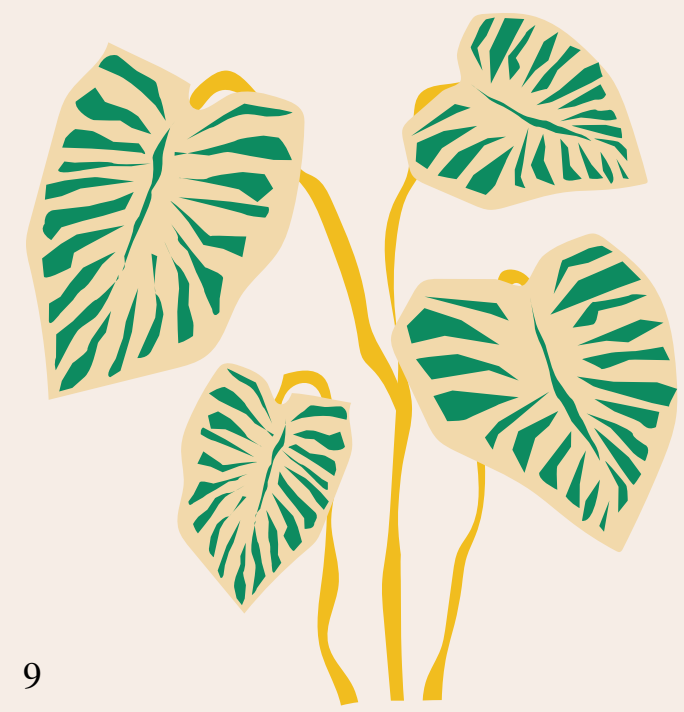
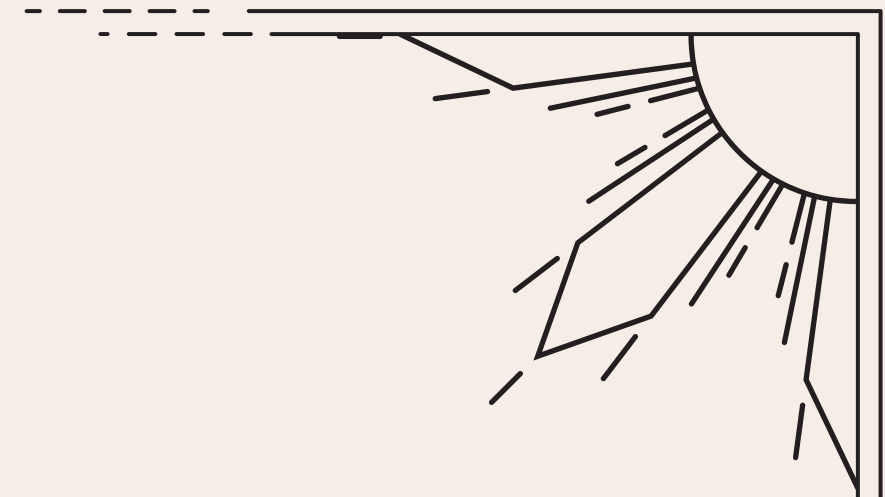
国内外での新たな石炭火力発電への投資の全面終了、脱炭素化に関する文書に、190の国と企業が署名。初めて合意したポーランドやベトナム、チリなど主要な石炭使用国も含まれます。主要経済大国では2030年代、貧困国では2040年代に石炭火力発電を段階的に廃止することが求められます。しかし、日本、オーストラリア、インド、中国、アメリカなど一部の石炭依存国は署名せず。日本は「資源が乏しく海に囲まれている日本にとって、多様なエネルギー源をバランスよく活用することが重要だと考えた」と理由を述べています。

## ● COP26でのCYJの活動

- セミナー
- 海外ユースとの連携
- 新聞社やテレビ局を通じた発信
- エンパワメント
- 対話イベント

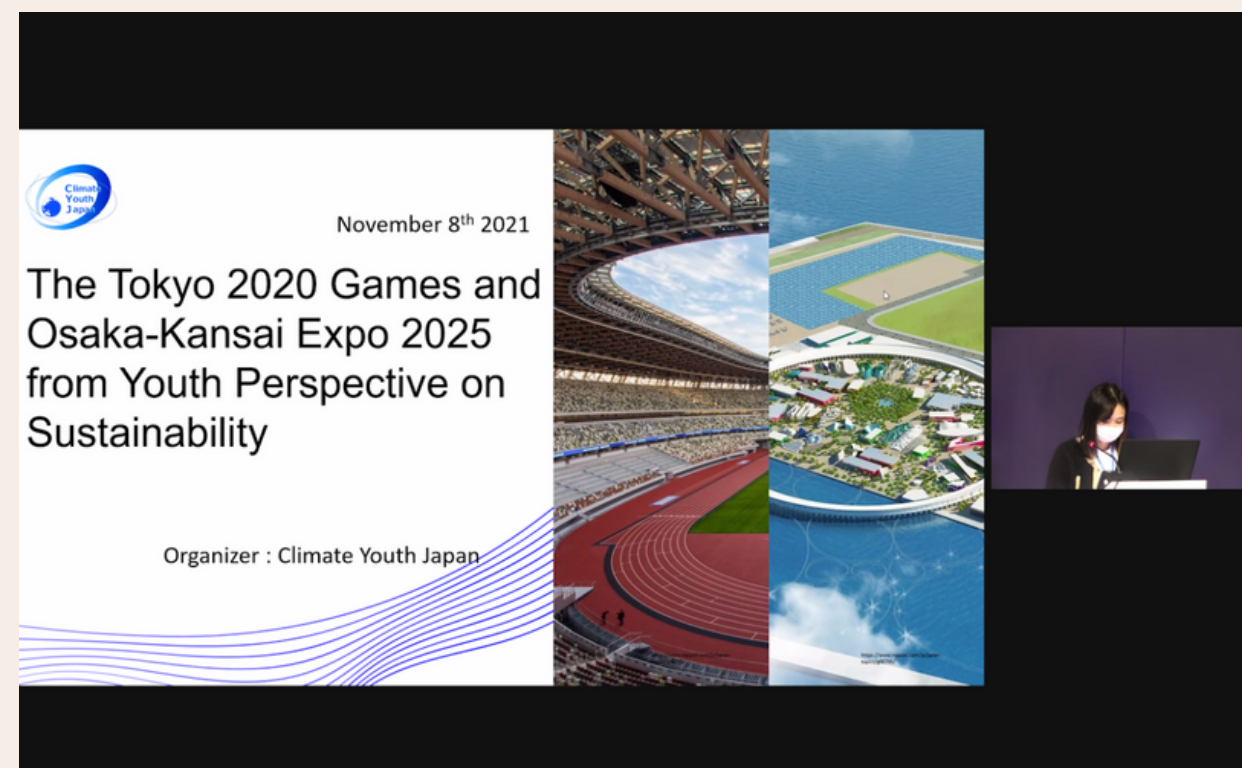
## ● セミナーについて

COP26ジャパンパビリオンではテーマである脱炭素社会の実現に貢献する技術や活動の一つとして、Climate Youth JapanがCOP23-25で発信していた東京オリンピックパラリンピック大会を如何に持続可能なもの（サステナリンピックと称していた）とするかに関して、大会後のユース視点からの評価を中心に意見発信、展示を行いました。現地で行うジャパンパビリオンのセミナー（90分）とオンラインで行うヴァーチャルジャパンパビリオン（30分）を中心に出展し、東京2020大会の評価できる点や改善が求められる点を団体内で収集した多様な視点から紹介、指摘し、課題については具体的解決策を提示、また、2025に迫る大阪-関西万博に向け、ユースとして可能なアプローチを模索し新規プロジェクトなどの発表も行いました。ヴァーチャルジャパンパビリオンでは東京2020大会、2025大阪-関西万博について、ユースとして可能な限り踏み込んだ意見発信を行い、ジャパンパビリオンのセミナーではClimate Youth Japanが主催する形をとりながらも、Fridays for Future Japan, Japan Youth Platform for Sustainability, 日本若者協議会と協働し日本国内の様々なユースの意見を発信し、よりよい未来を見据えた対話ができたと感じています。今後も社会問題に取り組むユース団体間での連携が増々活性化することを期待します。一方でコロナウイルス感染拡大の中開催されたCOPということもあり、予定していた海外ユースの登壇を実現できなかったことは非常に心残りです。また、集客力の面でも課題が残りました。気候危機への意識の高まりが世界規模で高まる中でユースに求められる役割を引き続き模索する必要があると考えています。



## 海外ユースとの連携

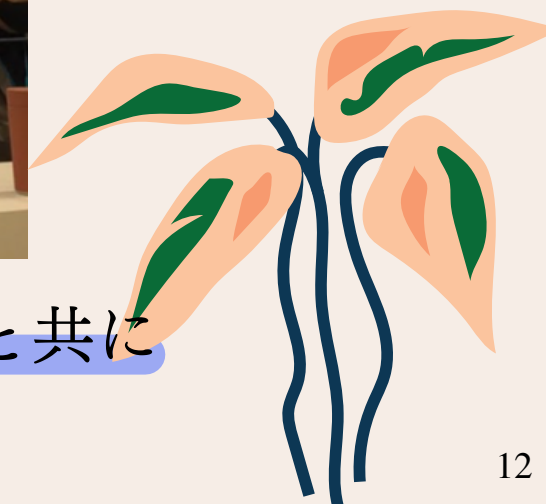
COP26という国際会議の利を活かして私たちが行った活動としては、アジアユース共同セミナーがあげられます。韓国パビリオンにて、韓国・台湾・香港・日本のユース環境団体から計6名が集い、各国のカーボンニュートラル政策についての忌憚ない評価やユースとしての展望を共有しました。アジアユースが集うという機会に、多くの海外ユースが観覧してくれました。CYJとしては日本の政策の中でも第6次エネルギー基本計画に言及し、石炭火力や原子力発電を使い続けるのかどうか不明瞭なロードマップへの不安を共有しました。また、将来世代や地元住民の間で見られる原発反対意見について、対話の重要性を主張しました。加えて、日本の環境技術や更なるイノベーションに期待が寄せられる中、コスト面やタイムライン面の両側面で気候危機に対応した迅速な導入が可能であるのか、指摘をしました。アジアユースの中で共通してみられた主張は、1.5°C目標に際する現在の目標設定の不十分さ、発表されているカーボンニュートラルや2030年目標までのロードマップの不確実性、そしてこれらに対する危機感でした。同時に、ユースとしての意見を収集・提示するだけでなく、いかに具体的なアクションへ落とし込むのかを重視したいという声も多くありました。今回は気候変動問題に取り組むユースとして、社会の中で果たすべき役割について、もう一度見つめ直す機会となりました。強い連携を示す欧州諸国に比べて、アジア諸国間の協働の余地は残っているとも考えられ、今後益々のキャパシティビルディングに期待したいと思います。アジア人、ユースという立場の参加者は少数派である中、このような貴重な機会を設定してくれた韓国ユースに感謝の意を改めてここに記させていただきます。



セミナーの様子



海外ユースと共に





## 帰国後の報告会を通じた エンパワメント

帰国後、複数回にわたりCOP26派遣報告会を行い、近年注目が集まる環境問題、気候危機の問題に若者として如何に向き合うかを参加者や他派遣団体のメンバーと共に考える機会としました。課題として若者たちの環境意識の底上げという以前から掲げる目標の達成不足を再度認識しつつも、世界の潮流に合わせ、若者の社会的責任を果たすためにも、より深い知見に基づき議論に参画する必要性を強く感じ、団体内でのメンバー育成の重要性も実感する機会となりました。またCOP26ではジャパンパビリオンのテーマにも恵まれ、企業の大人たちとも積極的に交流することができ、帰国後も定期的に意見交換を行っています。今後、世代の壁を越え如何に持続可能な社会のための具体的貢献を成し遂げられるのかが重要となり、大人たちとの協働に向けた大きな足掛かりになると期待しています。より良い未来社会の構築に向けて私たちにできる精一杯を、COP26で得たチャンスを十分に生かしながら自問自答し続けなければならないと強く感じています。

## 新聞社やテレビ局を通じた発信

開催期間中から期間後にかけて、複数の新聞社、テレビ局より取材依頼を受け、派遣メンバーを中心とした私たちの見解を報じていただきました。今年はCOP26会場で直接取材していただくこともあれば、国内メンバーとの連携を図る形でオンラインでの取材も経験しました。主な主張として、気候変動を超えた"気候危機"としての認識が日本では広まっていないことを指摘した上で、他のユース団体をはじめ企業など多様な主体と連携し活動を進めていくという展望を述べました。高度情報社会の現代において、マスメディアという主体は大衆に広く画一的な情報を届ける役割を担っています。気候変動問題の解決に向けて個々人が動いていくためには、多様な情報が社会に共有され、必要に応じて参考にできる環境が欠かせないと思われまます。残念ながら実際には報道されなかった取材内容もあったものの、メディアの方々にCYJ、そして一若者としての意見を知っていただけたことは良い機会でありました。

### COLUMN ブルーゾーンとグリーンゾーン

会場は大きくブルーゾーンとグリーンゾーンに分かれています。ブルーゾーンは、実際に国際交渉や各国のサイドイベントが行われているエリアで、アクセデーションを入手することで入場することができます。ここではCOP開催中、常に会議や各国のセミナーなどが開催されており、様々な情報収集・発信を行うことができます。グリーンゾーンは市民にも入場を開放したエリアとなっており、地元の企業などが自社の活動をアピールしています。

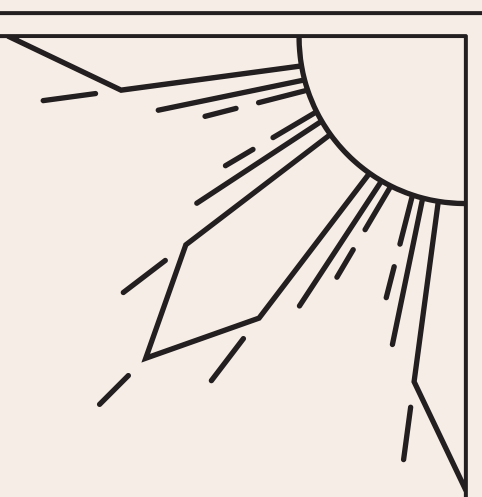


←ブルーゾーン



グリーンゾーン⇒





## 対話イベント

対話イベントとは、いろいろな考えや行動を知る場を作る。（主張ではなく対話・相互的な交流）を目標として気候変動に関わるあらゆるセクターとの関係性を再構築していくものです。COP事業として様々なセクターとの対話活動を計4回開催しました。CYJのOB・OG、社会人で働く方、ユースなどと対話を行い、様々な考えや奥に潜む想いを知ること、各セクターの溝を埋め協働を深めることを目指しました。さらにその声を拾い上げることより地に足ついた政策提言やCOPの場での発信を進めてきました。実際に多くのユースや参加者と対話を行うことで、問題意識の差や目指す世界について共有することができ、協働を促すきっかけにもなりました。

## SNSを通じた発信

今年度は、COP26開催の約半年前からInstagramでの発信を企画し、COP26に向けた知識の構築や盛り上がり作りに注力しました。COP26開催までは、主にCOPについての基本情報や、気候変動についての知識を発信し、COPについてのニュースでよく出てくるワードや、メンバー自身が深掘りしたい気候変動のテーマについて、フォロワーも一緒に学べるようなわかりやすい投稿を心掛けました。COY/COP26の開催中は、派遣メンバーからの現地の声をInstagramとFacebookで発信、また毎日現地からの最新情報をレポート形式で発信しました。加えて、現地グラスゴーに派遣されたメンバーとのインスタライブも開催し、一緒にパビリオンを周るなどしてCOPの様子を臨場感を持って届けることもできました。SNSの運用を始めて徐々に伸びてきたフォロワーは、COP26開催期間中に1,000人に到達し、多くの人にCYJという団体を知ってもらうことができたと思います。

### COLUMN

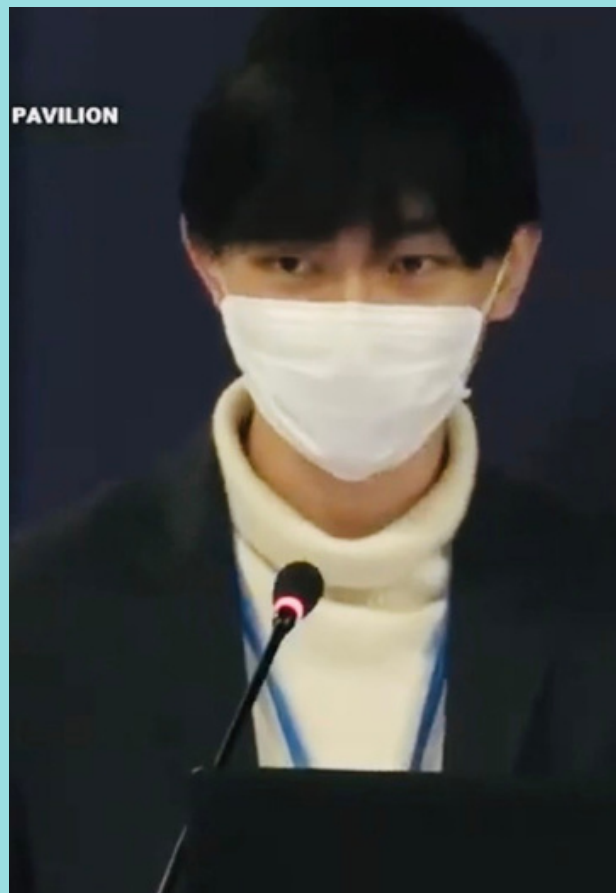
#### コロナ禍の開催

今年度のCOP26では、世界的に大流行している新型コロナウイルス感染症という今までにない障壁があり、参加を希望する人々に平等な参加権利が与えられるかどうか懸念の声がありました。例えば、ワクチンが十分に行き渡っていない国出身の人々の安全な入国が確保できるのかといった点です。議長国イギリスは参加者に対して、事前にワクチンの2回の接種機会、入国後のPCRテストを無償で提供した他、オリジナルマスクやアルコール消毒等のキットを配布しました。

包括的(Inclusive)なCOP26を目指した結果と言えるでしょう。加えて、会場に入るために毎日のラテラルフローテストの陰性提示が義務付けられていたので、私たちも定期的に身体状態を確認しつつ、安心して臨むことができました。一方で、密を避けるために交渉部屋への厳しい人数制限が設けられており、オブザーバーが立入を禁止されてしまうという点が残念だという声もありました。

## COP26に参加した理由

### COP26派遣事業 現地統括 古賀 瑞



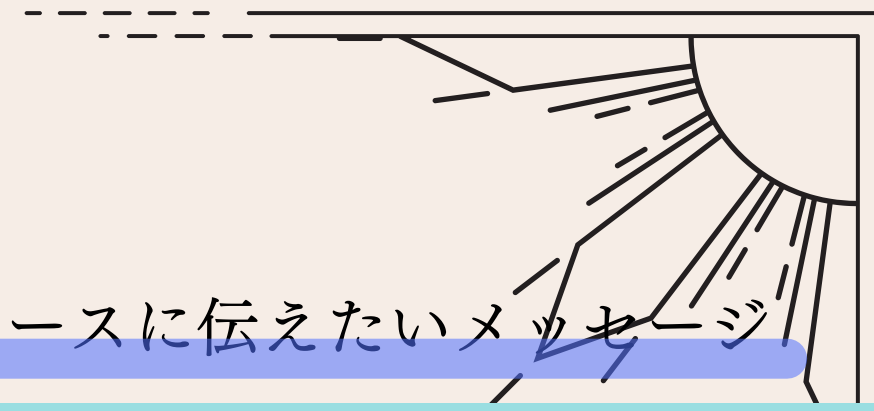
気候変動への若者からのアプローチは近年大いに盛り上がり、実際に多くの機会を頂いている。一方で私は時々、その期待に見合った価値ある意見や提案を行うことができているのかなとふと疑問に思うことがある。COP26という場で関わることでできる文化、世代を超えた多種多様な人々との対話の中で思考を巡らせ、未来のために何が成せるかを熟考する機会としようと思いつき参加を決めた。また、現地で得られる全ての経験や情報を最大限生かし、日本ユースとしての行動の価値や魅力を再認識し、国内の熱意ある方々とともにあるべき姿を模索していきたいと考えた。一方で、COPでは一方的に情報を得るだけでなく若者として様々な意義主張を発信する場も存在する。実際にパビリオンのセミナーに登壇するだけでなく、間接的ではあるが海外ユースやメディアを通して発信などの活動も行うことができる。自身の学びを通して得た見解を発信し、それを見てくれた方々からのフィードバックを基に議論しながらブラッシュアップしていく作業は非常に魅力的だと感じた。そして最後に、実際に国際交渉が行われている場に参加することで、交渉を行う大人たちの真剣さや気候危機の解決を切に願う若者たちの情熱を体感したいというのも大きな理由の一つであった。

## 現地での活動

現地の活動エリアとして3種類存在する。1つ目はブルーゾーンだ。実際に会議室で交渉の様子を見る機会というには非常に貴重であり、より当事者意識が強まったように感じる。Climate Youth Japanは環境省が運営する日本パビリオンに出展し意見発信を行ったが、他にも様々な企業やNGOが同様の活動を行っており、私は日本パビリオン出展企業の説明員の方々との対話や、環境省、経済産業省、他様々な研究機関のイベントに参加し、セミナー終了後、登壇者の方々とお話する機会も頂いた。また、各国のパビリオンのイベントにも参加し、日本人として普段持ち合わせていない視点からの問題提起や、日本の脱炭素の現状や日本の科学技術に対する思いなどにも触れることができた。2つ目はグリーンゾーンである。ここはCOP26関係者以外も入ることができ、近年の企業の環境意識の向上を強く感じた。3つ目は会議場の外である。グラスゴー市内ではCOP期間中複数回、大規模デモが行われ、今年度はCOVID-19感染予防のためデモ自体には参加しなかったが、市民の熱意を強く感じる事ができた。また会議場前では毎日環境団体によるデモが行われていた。

## ユースに伝えたいメッセージ

気候危機が世界に浸透していく中で、我々若者には様々な期待がかけられている。それは大きく分けると意見表明と具体的行動であると思う。意見表明に関しては、近年、ユースのポリシーメイキングへの参画を各ユース団体が訴え続け、実際に多くの機会を頂いていることから明らかであるように、大人たちがユースの意見に耳を傾けるという社会の土壌は成熟しつつあると感じる。我々ユースはその期待に応えるべく努力を続けていかななくてはならない。そのためには、より深い知見を求め日々勉強に励みながらも、多種多様な人々との対話を繰り返し、物事を俯瞰しながら自身の意見をブラッシュアップしていかなくてはならない。未来を担うZ世代として、活力を見出し、自身の持つ大切な視点を活かしながら、至らぬ部分は賢者に頼り、寄り良い社会を共創する姿勢を持ち続ける必要がある。具体的行動にも重要なユースの役割である。環境とは我々の生活の姿であり、切り離すことはできない。勿論、脱炭素を求め行政や企業に提言を行うことも大切だが、我々ユース自身が新たな社会の潮流を生むことに貢献することも可能だろう。気候変動の軸として語られるエネルギー問題のみにとらわれることなく、資源循環や社会の在り方、ライフスタイルの変革、環境教育といった多様なアプローチに全力で挑み続けなければならないと感じる。



# メンバーの感想

## COP26に参加した理由

### CYJ 2021年度会計 柳澤 暦花

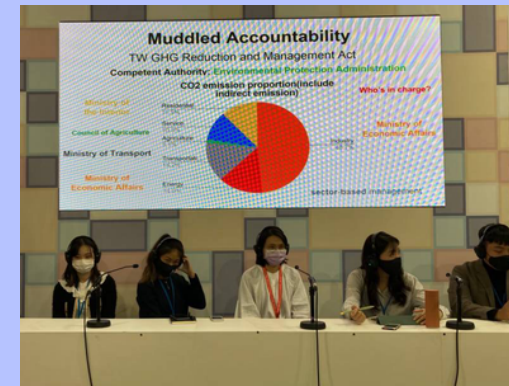


今回COP26に参加した目的は主に二つあります。

一つは、国内における環境活動では気づくことのない視点・異なる見方を吸収し、見識の幅をグローバルレベルに広げたいと思ったからです。日本という先進国で教育を受け、限られた情報に依存する中、どうしても気候危機の観点に欠けてしまったり世界の潮流を自分ごととして捉える機会は少ないと感じています。COPという国際会議の場には環境問題にフォーカスした人・知識・事例が集約するため、今後日本のユースに求められることの模索や、個人的な将来像を描くにあたっても貴重だと考えました。

二つ目は、日本ユースとしての役割を果たすためです。日本から世界へ向けた発信として、環境省の方々に頂いたジャパンパビリオン登壇の枠を活かし、過去のCYJの先輩方が築かれてきた東京五輪と持続性をテーマにしたプロジェクトの終結を担いました。同時に、日本のカーボンニュートラル政策についてユースの視点から説明、評価をしました。また、ユースが見たCOP26や世界の動きを日本国内にいる将来世代に伝達し、環境意識の向上を図ることも果たすべき責務だと考えていました。

## 現地での活動



二つの観点から分類して説明すると、まずアウトプット活動として挙げられるのが日本パビリオン、韓国パビリオンでの発表です。東京五輪や大阪万博という国際的な祭典とサステナビリティの結びつきや、カーボンニュートラル政策について熟考し、他ユース団体協働して創り上げることができました。リーチアウトの規模感に課題は残るものの、環境活動に取り組む日本ユースとしての存在感を示す一歩に繋がったと感じています。詳細は別頁に記載があるため、ご覧いただけると幸いです。インプット活動としては、100近いパビリオンの観覧、個々人の興味分野に沿ったセミナーの聴講、海外ユースとの対話、企業とのコラボレーション活動、会場内外における偶発的なコミュニケーション等が挙げられます。気候変動問題という複雑かつ多様な問題に起因する社会課題を考えるにあたって、世界各国の生の声や、普段ユースとして関わりを持つことがなかった大人との会話は貴重な学びとなりました。

## ユースに伝えたいメッセージ

1992年にリオで開催された、国連環境開発会議（地球サミット）におけるユース代表、Severn Suzukiさんのスピーチを耳にしたことはあるでしょうか。「何を言うのかではなく、行動で示してください」「直し方がわからないのであれば、壊し続けしないでください」。30年経とうとしている今でも悲しいことに、ユースは同じメッセージを訴えかける必要があるかもしれません。しかしながらCOP26を通じて、ユースの声・変革のパワーは着実に大きくなっており、将来世代である私たちユースの声を聞き入れる社会体制への兆しを肌で感じました。世界と比較してみても、日本のユースとして出来ること・果たすべきことは多数存在すると思います。まずは環境活動を自分ごととして捉えるユースの輪を広げていくこと。将来を見つめてビジョンを描く議論の場に参画出来るように学ぶこと、キャパシティを構築していくこと。多くの皆さんと、共に歩んでいけることを強く願っています。



# メンバーの感想

## COP26に参加した理由

### CYJ 2021年度代表 高野 愛



私はCOP26への参加を通して、海外のユースとの交流から彼らの活動を知り、また気候変動やその他環境諸問題に関する国際交渉の現状を学びたいと考えました。気候変動をはじめとする環境諸問題の解決策を模索する上で、常にグローバルとローカルの両方の視点を持つことは大切です。私は、幼い頃からガールスカウトに所属し地域の美化活動を行ったり、高専と大学の卒論ではゼロ・ウェイスト運動を事例として地域の環境問題と市民活動の関連性について調査を進めてきたりしました。ですがこうしたローカルな草の根運動を重視してきた一方で、グローバルで大局的な動きには十分に目を向けられていませんでした。そこで、COP26に参加し気候変動に関する交渉の最前線を肌で感じることは自身の視野を広げる絶好の機会であると考え、今回の派遣事業に参加しました。



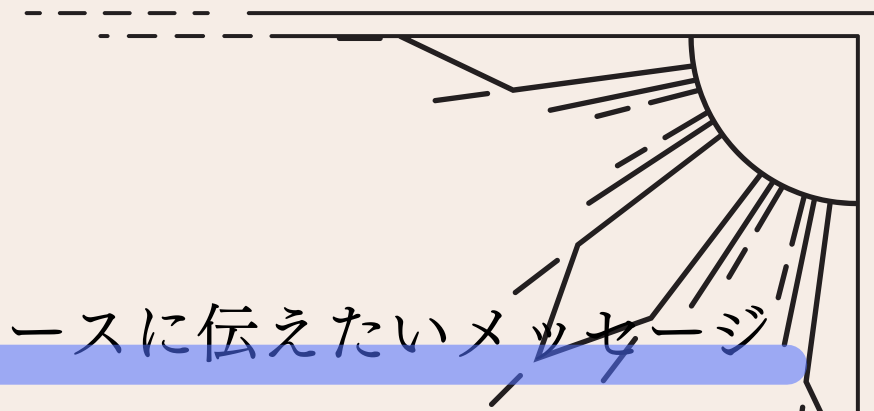
## 現地での活動

現地では各国・地域やNGOのパビリオンを訪れ、セミナーや技術展示を見てまわりました。当初は海外ユースの活動や意見を知ることを大きな目的としていましたが、想定よりも会場内ではユースの姿を見つけることができなかつた点は困難だったといえます。しかし韓国パビリオンでのセミナー後に知り合ったり、会場内で積極的に話す機会を得たりした結果、海外ユースの生きた声を聞くことができました。なかでも、原子力発電を巡り議論できたことは良かったです。その他にも、会場においてはゴミ箱の隣に設置されていたリユーザブルカップ回収箱の存在や配布された交通パスのリサイクルの仕組みなどを知ることができました。また会場の外でも、街のレストランではヴィーガンなど多様な食の選択肢が一般的であったり、COP会期中であったためか環境ビジネスに関する広告を多く見かけたりし、現地参加ならではの多くの発見を得ることができました。



## ユースに伝えたいメッセージ

前回のCOP25が開催された年は、Climate Strikeなどを通して環境問題に対する理念のもと行動しているユースの存在感が強く認知されてきていました。現在、パンデミックによりそうした大規模な活動は制限されていますが、問題解決のためのアクターの一員として、新しい形でどのようにユースは貢献できるかを考える期間が訪れたのだと思います。私はその一つの方法として、継続的に声をあげていくこと、同世代やその他に対し意識を伝播させることに加えて、具体的で現実的な政策やライフスタイルについて議論していくことが考えられると思います。私はCYJで活動する中で、気候変動問題に対する無関心層へアプローチしていくにはどうすれば良いかという疑問を抱き、自分なりの答えを模索している最中です。暫定的には、まずは認知→行動→伝播のサイクルを地道に増やしていくことが重要だと考えています。この報告書もそうした方を含めより多くの目に留まり、メディアで報道されているただの国際会議ではなく、自分ごととして捉えてもらえるような試みの一環であるといえます。そのため、まずは認知してもらう場を増やし、そうした取り組みに巻き込んでいくため今後も活動していきたいと思っています。



# メンバーの感想

## COP26に参加した理由

私は、COP26をユースの最後の活動として、より多くの日本の次世代のユースが積極的に水資源保全やエネルギー保全、経済発展などで意見を活動を進めることができる機会を繋げたいと考えて、この会議に参加した。国際会議において、日本のユースの活動は他国のユースの活動と比較しても少ない。そのため、私はこの機会を活かして、気候変動問題に取り組み、国外に羽ばたくことができる人たちが単にCOP26に参加するのではなく、各国のブースやパビリオン、セミナー、本会議などで具体的な意見を実施することができる機会を構築できるようにしたいと考えている。



## CYJ 2021年副代表 田中 迅



## 現地での活動



COP26では、複数の公式サイドイベント、各国ブースでのセミナー、閉会式、市民サミットにて登壇者、ファシリテーター、レポーターとして合計13の公式イベントに、10の非公式イベントに参加した。特に、水やエネルギー、気候変動、キャパシティビルディング、国連関係のイベントに特化して、イベントに登壇し、それぞれの分野でアジア太平洋地域や日本の観点からの意見を提示した。また、GYDIやLeaders Clubのメンバーとして、それぞれの団体の活動である意見提示や団体としての活動を進めた。その上で、気候適応の問題やインフラ投資に関するトピックについて集団での実施を行うことで、複数の意見を提示した。

## ユースに伝えたいメッセージ

今日における、日本のユースの活動は、昨年と比較しても低下する傾向があり、反面、東南アジアの国々やインドのユースによる活動の幅の展開及び発言力が大きく向上した年となった。特にインドネシアやマレーシア、フィリピンなどの国々によるアジアユースのCOP26での台頭は公式イベントにも見られ、今後のCOPに対しても強い影響力を保持した状態で、気候危機について言及することが多くなると考えられる。アジア太平洋地域に属する日本としては、この状況はこれまでの欧州中心の議論からアジアに議論の焦点が転換されるため、喜ばしい状況である一方で、日本の発信力が中国や韓国などの東アジアの国々と比較して準備が不足している側面から、日本の意見がより一層提示されることが難しくなる可能性があると考えられる。



# メンバーの感想

\* Climate Youth Japanの協力メンバーにも参加いただきました。

## 佐座マナ



### COP26に参加した感想

会場内ではたくさんの新しい合意ができ、拍手が絶えない中、会場外では批判の叫び。グreta・タトゥーンベリーを始めとした若者達がCOP26での合意だけでは足りなく、本気で気候危機に取り組むべきという怒りを叫んでいました。

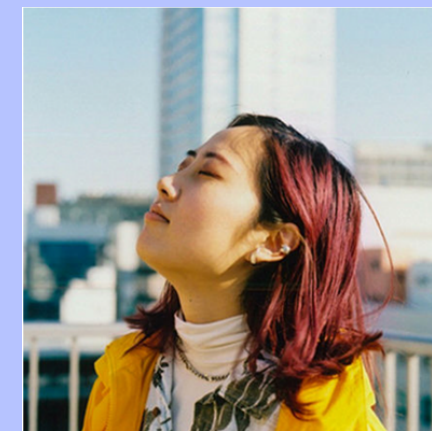
この1年Mock COPの事務局として「気候変動教育の義務化」を推進し、23カ国以上に署名をいただきました。オンラインのみで会っていた仲間の多くはMAPA出身の友人達の中には海面上昇により家を無くした人もいれば、干魘により数時間も水を汲むために外で並ぶことを体験している友人がいます。10年後までに何をやるかだけでなく、今日すぐにもやらないといけないアクションを実現することを若者達は求めました。COP26で世界がダイナミックに変わることを求めている若者達は気持ちを裏切られたと感じていますが、若者としても行動を起こす仲間づくりに励まなければならない課題があると実感する機会となりました。

### 今後の取り組み

大人と若者との温度差がありますが、互いの長所を活かし、パリ協定を実現するためのムーブメントを若者が旗振りの役をとる活動を推進できればと考えております。これから2025年大阪・関西万博に向けて「100万人のサステナブルアンバサダーを育成」するプロジェクトを進め、日本人が自分達の気候へのインパクトを責任を持ち解決していくことを促せたら幸いです。



## 佐座レミ



### COP26に参加した感想

COPは世界中から様々な背景を持った人・団体・組織が集まり、一人一人持つ強い意志を貫く場所であると思ひ参加をしました。環境問題は深刻であるとCOPの参加者は全員同意するでしょう、ですがCOPという特定の場所でその意志を具現化できるのか、COPでの参加で次のステップに繋がれるかはまた別の問題なのだと個人的に思いました。やはりUNは国自体に政策を強制できない立場のため、気候危機への対策はまだまだやる事が山積みされていると感じました。

### 気候アート

COPでの出来事は環境問題に関係のある部門や民間が興味を持っています。もっと幅広く環境問題へのアクションを伝えるのにデザインはとても有効的なツールです。環境問題はとても深刻かつ複雑です。情報自体が長くつまらない事が多々あります、そんな時にデザインを加える事で普段興味を持たない人でも環境問題に手をつけることになるでしょう。だからといってデザイン全てが環境問題についての作品でないといけないとは思いません。デザイナーが今すぐに制作しているものから手を止めて、環境問題に関連したものを制作するのではなく制作した物の過程や完成後の取り扱いが環境に良いというのが一番なのではないでしょうか。最終的に見ている人興味を抱くものでなければ環境問題についての情報や認知度は上がらないのではないのでしょうか。そういう形でアートがこれからのCOPでも導入されていくことを推進してもらえれば幸いです。



## 会場のサステナビリティ

会場内のゴミ箱は生ゴミ、燃えるゴミ、缶、紙に分かれていて、分別が徹底されていました。ゴミ箱の横に設置されている回収箱はリューザブルカップ専用のもので、会場内の飲食店で飲み物を買ったと、青いリューザブルカップで提供され、使用後は再度会場内で使用されるという工夫がなされていました。加えて初日の受付で配布されるアルミ製のマイボトルを快適に使えるように、会場のあらゆる場所にウォーターサーバーがありました。このマイボトル以外の配布物として会期中自由に使える交通パスがありましたが、これも100パーセントリサイクル可能な素材で作られていました。会期後に指定の場所に投函して回収してもらうシステムのようなものでした。



さらには毎日首からかけていたネームタグも出口に回収箱があり、至るところで3Rが意識されていることが分かりました。食に関しては、80%の会場内の飲食はCOP26が開催されるスコットランド産の旬の食材を使った食べ物で、フードマイレージを減らす努力がされていました。メニューもヴィーガンや菜食などエシカルで多様な選択肢が用意されてお

り、また会場外でもそうした傾向が普遍的だったので、その点ではまだあまり浸透していない日本と比べて街全体として先進的だと感じました。

## 編集後記

新型コロナウイルスが与えた影響は、苦しくも私たちがおかれている社会の持続性を再度考えさせられる機会になりました。世界がグローバルになって、モノも情報も簡単にどこにいてもアクセスできるようになりましたが、一旦社会が混乱に陥ると、サプライチェーンが遮断され、これまでの社会システムが持続できなくなりました。そんな中コロナ禍の景気回復策としてグリーンニューディールやESG投資などがこれまで以上に活発になり、世界が少しずつ本気で環境問題の解決に取り組む姿勢が垣間見えるようになってきました。

私たちCYJは未来の世代の代表として、これまで世界の先端に触れ、意見を発信し、ユースのエンパワメントを行ってきました。未来への不確実性は高まるばかりですが、だからこそユースとして声をあげ意見を伝えていく意義があると思います。この冊子を手にするみなさんと一緒に何ができるかをじっくりと考え、未来のためぜひとも一緒に行動を起こしましょう。私たちは気候変動の影響を最初に被り、解決できる最後の世代です。

終わりに、このCOP派遣を支援してくださったNGOのみなさま、関係者のみなさま、国内で協力してくれたメンバーのみなさん、この冊子を手にとっていただいたみなさまに深く感謝申し上げます。